

道南地方の樹木病害虫

(広葉樹編 -)

館 和 夫

道南地方の公園，緑地，並木などに用いられているケヤキ，ハルニレ，プラタナス，ウメ，サクラ類，ナナカマドなどに，近年，発生した病害虫の発生例，病徴，防除方法のあらましをのべる。

ケ ヤ キ

社寺の境内や屋敷まわり，公園などでときおり見かけるケヤキには，ケヤキフシアブラムシが寄生している場合が多い。4月頃，樹皮の上で越冬した卵からふ化した幼虫は，展葉期の葉の裏側から吸汁加害する。その刺激によって緑色をした多数の虫えいができる（写真 - 1）。初夏，有翅の胎生雌虫が虫えいを脱出して夏寄生のササ類に移動し，その根に寄生・繁殖する。秋に再びケヤキに戻った有翅の産性雌虫から産まれた有翅虫（両性）は交尾し，雌虫は体内に卵をもったまま樹皮の上で死亡する。毎年，10月中旬になると無数の有翅虫が発生して空中を浮遊し，やがて灰色の死骸となってケヤキの根元に降りつもる。防除には虫えい形成期以前にエカチン粒剤やエストックス乳剤等の浸透性殺虫剤，またはキルバール，スプラサイド等の標準倍液を葉上に散布するとよい。



写真 - 1 ケヤキフシアブラムシの虫えい
(1983年6月、函館市桔梗町)

プラタナス

公園樹，街路樹等に広く用いられているプラタナス（セイヨウスズカケノキ）には，ときおりヒモワタカイガラムシやクワゴマダラヒトリ，ヒメシロモンドクガなどが発生することがある。

ヒモワタカイガラムシは，初夏の頃，雌成虫が小枝や葉の上に白いリング状の卵のうを形成するのでよくめだつ（1979年7月，函館市花園町）。実害は少ないが美観をそこなう



写真 - 2 クワゴマダラヒトリの老熟幼虫
(1983年6月，七飯町本町)

のでみつけしだい切りとって焼却するとよい。

クワゴマダラヒトリは、きわめて雑食性の食葉害虫で、クワのほかニセアカシヤなど多くの樹や草の葉を食害する（写真 - 2）。胴部には白と黒の剛毛を密生し、背中には金属光沢をおびた青藍色のコブがある。防除にはDDVP剤の1000倍液を反覆して散布すると有効である。ヒメシロモンドクガ（コツノケムシ）は、クリ、サクラなど多くの樹種の葉を食害する雑食性の害虫で年2化。函館地方では7月中旬と8月中、下旬に多く羽化する。加害はいづれも分散的で、実害は比較的少ない。加害の初期にスミチオン、デブテレックス等の1000倍液を散布すれば防除できる。

ハ ル ニ レ

道内の公園などに多いハルニレ（アカダモ）は、春に開花結実する特色ある緑化樹であるが、青葉の頃になると、ヒオドシチョウの幼虫に葉をそっくり食いあらされることがある。この虫は年1化で、若齢の頃は光沢ある黒色をしており、群がって糸を張りながら加害する。胴部には黒い棘状突起があつてよくめだつ。老熟すると分散するので、加害の初期に枝ごと切りとって捕殺するか、スミチオン、デブテレックス等の1000倍液を散布して防除する。なお、函館地区の発生例（1972年6月、桔梗）では、6月上旬を盛期として加害し、中・下旬に蛹化、7月中旬に羽化するものが多かった。

その他の被害としては、ニレメンチュウなどとよばれる数種類のワタムシが発生して虫えいをつくり、美観をそこなう場合もあるが、実害はそれほど大きくないようである。

ウメ・サクラ類

ウメ・サクラ類は、道南地方でも主要な花木として、また、ときには果樹として古くからいろいろな品種が栽培されている。これらは病虫害の多い樹種で、目にふれたものだけでもつぎのようなものが恒常的に、もしくは突発的に発生して生育上の障害となっている。

ウメに多いもの ウメコブアブラムシ、モモアカアブラムシ、タマカタカイガラムシ、ウメエダシャク

サクラに多いもの ササキコブアブラムシ*、(サクラワシアブラムシ)、サクラコブアブラムシ、キビクビレアブラムシ、ムシ、イラガ*、エゾシロチョウ*、モンクロシャチホコ*、リンゴケンモン、ヒメシロモンドクガ、アカタデハムシ、胴枯病、さめはだ胴枯病、デルメア枝枯病、てんぐす病、根頭がんしゅ病、こぶ病

共通のもの ユキヤナギノアブラムシ、ウメシロカイガラムシ*、クワシロカイガラムシ、コスカシバ*、オビカレハ*、カクモンヒトリ、サクラケンモン、マイマイガ、モンシロドクガ

以上のうち、被害のめだつものについてのべる。なお、*印を付した一部の病虫害については季報36、38号を参照していただきたい。

ウメエダシャクは、ウメのほかモモ、サクラ、リンゴ、ツルウメモドキなどを害するシャクガの一種で、黒い胴部に黄のこまかな斑紋をもつ幼虫が6、7月ころ葉を食害する（1977年7月、大野町向野）。成虫は7月下旬から8月上旬にかけて羽化する。植木類の植だめなどに発生した場合は、商品価値をおとすので無視できない。薬剤に比較的強いので、DDVP剤、またはカルホス乳剤の500倍液程度のものをなるべく早目に散布する必要がある。

エゾシロチョウ 1975年6月、函館市湯ノ川地区のソメイヨシノに発生したのをはじめとして、翌年から1978年頃まで五稜郭公園を中心に大発生して話題をあつめた害虫である（写真-3）。幼虫は黒褐色の地に橙黄色の短毛を密生し、群棲してサクラのほかリンゴ、ボケなど、バラ科の樹木の葉を食害する。2、3年くらい大発生が続いたあとは激減するが、防除を要する場合は、加害の初期にスミチオンなどの有機燐剤の標準倍液を散布するか、枝ごと切りとって焼却する。また、齢期の進んだ幼虫に対してはクロルピリホス剤（ダズバン）の800～1000倍程度のものを2、3日おきにくり返し散布すると有効である。

アカタデハムシ 夏、葉桜になった公園内を散歩するとサクラの葉に無数の小さな孔があいていることに気づく。アカタデハムシの被害で、葉の上に淡黄褐色の小さなハムシがとまっている（写真-4）。成虫の出現時期から推して年1化。卵越冬するものとみられる。防除には、イタヤハムシの例にならって、ダイアゾノン、デナポンなどの粉剤を加害初期にむらなく散布すれば有効であろう。

コスカシバ この地方では、胴粘性病害とならんで栽培上の主要な障害となっているもので、幼虫はサトザクラをとくに好んで加害する。樹皮下に穿入して虫糞を排出し、それと共にゼリー状の樹脂が漏出する。ひどく加害されると樹勢が弱まる。成虫は一見ハチに似た黒い体に黄色い横縞をもつ翅の透明な蛾で、春から秋にかけて不規則に羽化、産卵する。ヤニや虫糞を目じるしに、針金などで幼虫を刺殺したり、スミチオン、マラソン乳剤などの50～100倍液を孔道に注入して防除する方法がとられてきた。最近ではフェロモントラップによる成虫の大量捕殺や、生殖行動の攪乱によって防除しようとする試みも行われている。

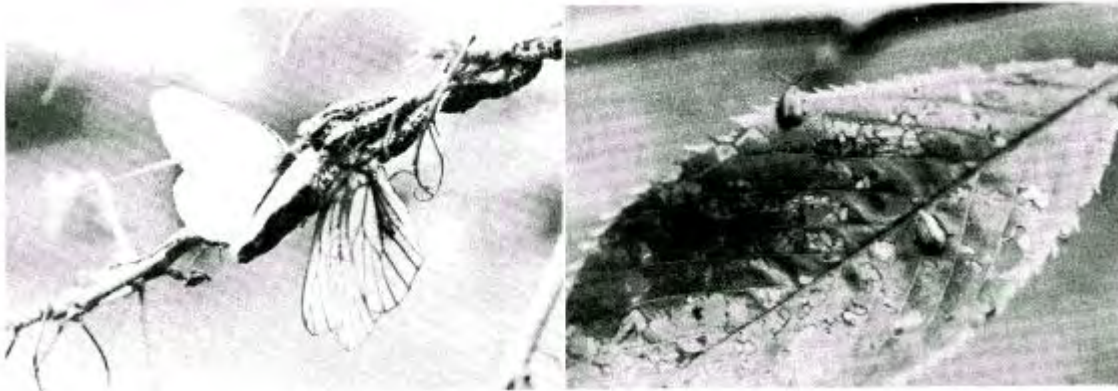


写真-3 エゾシロチョウの成虫と繭
(1978年6月、函館市五稜郭公園)

写真-4 アカタデハムシの被害葉と成虫
(1983年8月、函館市五稜郭公園)

サクラ胴枯病 (病原菌 *Valsa ambiens*.) サクラの胴枯性病害のうち、道内では最も重視されているもので、ソメイヨシノなどのサトザクラに多い。凍害などが誘因となって樹幹や太い枝の分岐点などに多発する。被害枝は開花後急にしおれて枯れる。被害部分はやや陥没し、樹皮に多くの小隆起を生じてさめ肌状となる。主として休眠期に病斑が拡大するといわれるので、病枝を早期に切除し、切口にチオファネートメチル製剤(トップジンペースト)を塗布するとよい。

さめはだ胴枯病 (病原菌 *Botryosphaeria dothidea*.) サトザクラの萌芽被など中位の大きさの被に多くみられる。病患部には、さめ肌状の小隆起を生じ、その割れ目から黒色の菌体がみえる。不完全時代の菌体の表面をうすく削ってみると多数の白点が現れる(写真-5)。病患部が枝のまわりを一周すると上部は枯死する。防除方法は胴枯病に準じる。

てんぐ巣病 (病原菌 *Taphrina wiesneri*.) サクラの病害として著名なもので、サトザクラの老木に多く発生する。道南地方でも函館市内の五稜郭公園、赤川水源池、上磯町清川、森町土台町などで過去に顕著な被害例がある。病枝はふつうより早く小型の葉を開くが5月頃急に黒ずんでしおれてくる。また、のちには葉の裏に白粉を帯び、さらに、枝の一部がふくれて、その先に弯曲した多数の不定枝を生じる(写真-6)。病枝は数年以内に枯死することが多いが、その過程で樹勢がおとろえ、また甚しく美観をそこなう。防除方法は休眠期に病枝を切除し、チオファネートメチル製剤(トップジンM等)の殺菌剤を散布することであるが、予め樹勢を健全に保つよう保護管理を励行することが大切である。



写真-5 サクラのさめ肌同枯れ病の菌体
- 下方の白点は表面をうすく削ったところ
- (1983年9月, 函館市五稜郭公園)

ナナカマド

庭園樹や街路樹、野鳥誘致木などによく用いられるナナカマドは、バラ科の樹木としては病害虫が少ない樹である。モモスズメ、リンゴケンモン、ヒメシロモンドクガ、モンシロドクガ、ムラサキイラガなどの食葉害虫をときおり見かける程度で、ときに激害をもたらすリンゴカキカイガラシなどの吸汁害虫の発生もいまのところ少ない。病害としてはナラタケ病(1982年7月, 桔梗)、などがまれに発生することもあるが被害は散発的で問題になるほどではない。

(道南支場)



写真-6 サクラてんぐ巣病の罹病枝
(1971年9月, 上磯町清川陣屋)